

## 岩手・宮城内陸地震を語り継ぐ一関市災害遺構の実態調査

伊藤 綾乃\*・井良沢道也\*\*・多賀谷拓也\*\*\*

The investigation of the Ichinoseki disaster ruins of Iwate and the Miyagi inland  
earthquake handed down from generation to generation

Ayano ITO\*, Michiya IRASAWA\*\* and Takuya TAGAYA\*\*\*

### 1. はじめに

災害遺構とは、災害の記憶を伝承させ、将来の減災へつなげることを目的として、過去に発生した災害の痕跡を保存したものである。ここでとりあげた一関市に設置された災害遺構（旧祭時大橋，市野々原被災地）は、岩手・宮城内陸地震のいわば爪痕である（ここでは一関市災害遺構と呼ぶ）。これらを保存することで、住民らの防災意識の啓発、及び災害の記憶の伝承を目指すものである。国内における事例としては、有珠山の2000年山麓噴火の災害遺構などがあげられる。本噴火は犠牲者こそ出なかったものの、長期の避難や泥流、火山灰などによる住民生活への被害は多大なものであった。泥流と火山堆積物で埋もれた住宅や、熱泥流で押し流された「木の実橋」等の災害遺構を保存することで、減災啓発に役立てるとともに地域の活性化につなげるための活動が行われている（1）。ここでは一関市建設部への打ち合わせと資料収集、一関市における災害遺構の見学者への聞き取り調査、及び同市巖美地区長及びJTB東北への聞き取り調査を行った。

### II. 一関市災害遺構の概要と経緯

一関市災害遺構のうち、旧祭時大橋が災害遺構として保存されるに至った経緯について、ご

---

Received March 20, 2014

Accepted June 9, 2014

\* 岩手大学農学部（現会津若松市役所）

\*\* 岩手大学農学部

\*\*\* 秋田県雄勝地域振興局

く簡単に述べる。岩手・宮城内陸地震は2008年6月14日午前8時43分頃、岩手県南部を震源として発生した。規模はマグニチュード7.2、岩手県奥州市と宮城県栗原市においては最大震度6強を観測した。人的被害をみると、17名が死亡、6名が行方不明、負傷者は448名となっている(2, 3)。なお、死者の多くは土砂災害によるものであった。国道342号に架かる祭時大橋は、この地震により秋田県側の尾根全体が地下深部で滑り崩壊を起こし、秋田側の橋台、橋脚と橋げたが一関側に約11m移動したことにより落橋したと推定されている。その他、市野々原地区においては大規模な地すべりに伴う河道閉塞が発生するなど、各地に大きな被害をもたらした。当初、落橋した旧祭時大橋を保存しようという取り組みは、災害復旧工事に関わっていた国土交通省岩手河川国道事務所、林野庁岩手南部森林管理署、岩手県一関市土木センター、同一関農林振興センター、一関市の各機関毎に進められようとしていた。そこで、復旧工事と同様に各機関が連携して整備を行うことで役割の重複を避け、互いに補完し合い、統一感を持たせることで、見学の効率化やわかりやすさを向上させるため、合同で災害遺構の整備計画を策定することとした。計画段階において、県は「橋台2基と秋田県側の橋脚1基を残して、それ以外は上部工も含めて全て撤去する」との意向を示していた。しかし、それでは見学時に災害の脅威が伝わりにくいと理由から、一関市が橋梁上部工の一部(秋田県側)保存を提案し、遺構として一関市が管理するという条件で県がこれを承諾、現在の形で保存されるに至った。復興にあたり、震災の教訓を忘れてはいけないと被災現場の保存を決断。防災教育や学習の場に役立てるため災害遺構として残した(4)。「防災意識の啓発」、「災害記憶の伝承」を目的として、被害が集中した一関市西部の山間部が現在も保存されている。

一関市災害遺構の主な3つの見学場所について以下から説明する(3)。祭時地区では(a)落橋した旧祭時大橋、(b)祭時大橋見学通路、(c)祭時被災地展望の丘の3カ所を、また市野々原地区では、(d)市野々原被災地展望広場があり、それぞれの場所については以下の図1と図2で示す。

#### a. 旧祭時大橋

一関市災害遺構のメインとなるのは、この旧祭時大橋の存在である(写真1)。国道342号にあった祭時大橋は、地震の揺れにより橋台・橋脚が乗った秋田側の尾根が地下深部ですべり崩壊を起こし、一関側に約11m移動したことにより落橋したと推定されている。地震当時、橋の落橋により国道342号が寸断され孤立してしまった地区の住民は、自衛隊のヘリにより救助された。一関市災害遺構の中でも大きなインパクトを見学者に与えている。

#### b. 旧祭時大橋見学通路

地震による被害は橋だけでなく、周辺の道路にも及んだ。見学通路沿いには、地震後の道路が地すべりにより地割れした損壊状態がそのまま保存されており、見学通路を歩くことで、被

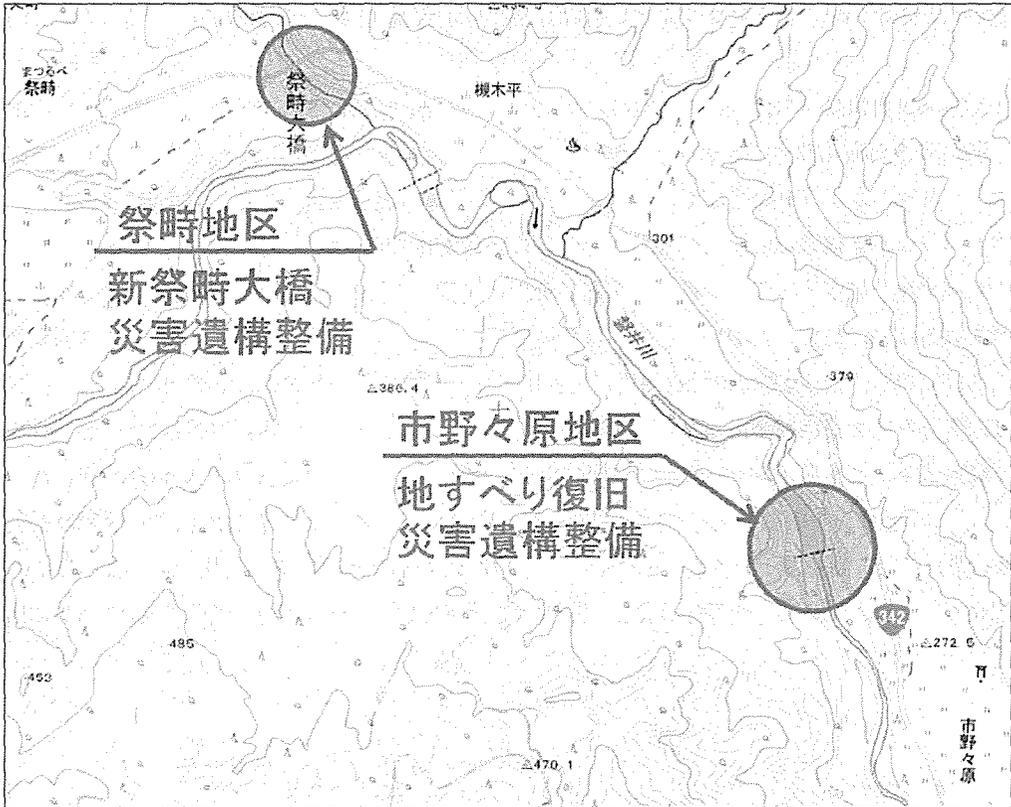


図1 一関市災害遺構（祭時と市野々原）の場所（出典：国土地理院（5）縮尺：1/25000）

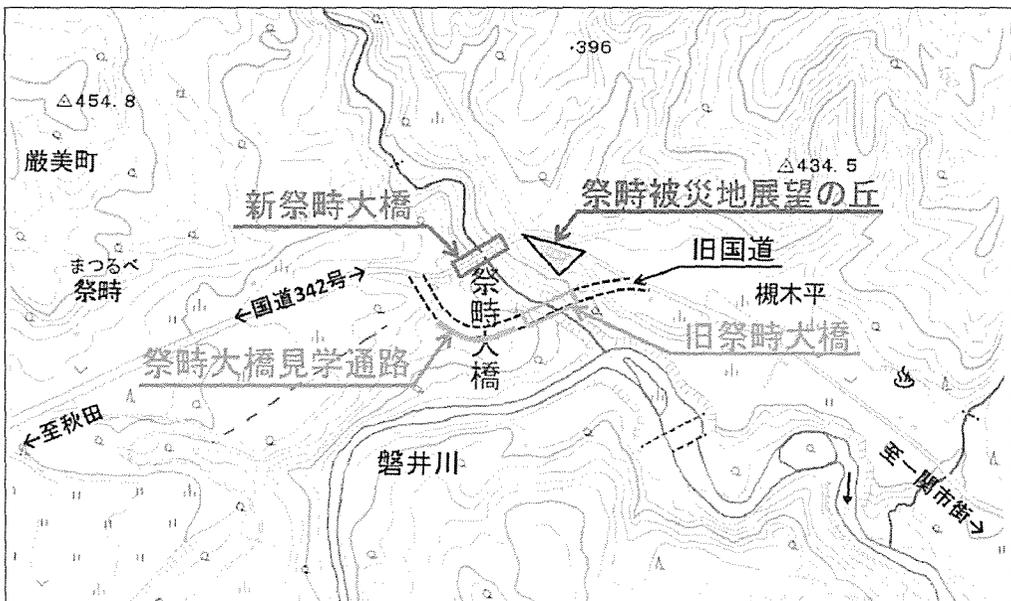


図2 祭時地区の災害遺構の位置関係（出典：国土地理院（5）縮尺：1/25000）

害の大きさを体感することができる。また、落橋した現場の近くまで行くことができる。

#### c. 祭時被災地展望の丘

旧祭時大橋を見渡すことができる展望台である(写真2)。約1500㎡のスペースに東屋や駐車場、解説パネル等を設置している。また、岩手・宮城内陸地震により落橋した旧祭時大橋や、地すべりによる被害は災害遺構としてそのまま保存されている。この展望の丘からは崩落被害の状況全体を見学することが可能である。また、旧祭時大橋の橋脚はオブジェ化されて展示されているほか、被害と復旧の取り組みについて紹介したパネルを展示している。

#### d. 市野々原被災地展望広場

災害当時、磐井川右岸では大規模な地すべりが発生した。この地すべりによる崩壊土砂約173万㎡は磐井川を幅約200m、長さ約700mにわたり堰き止め、上流側に大きな天然ダム(湛水面積20万㎡、湛水量179万㎡)を形成した(写真3)。この天然ダムが決壊した場合には、大規模な土石流が発生し、一関市街地まで甚大な被害が生じることが想定された。また、この地



写真1 落橋した旧祭時大橋(一関市資料より引用(3))



写真2 展望の丘で説明を受ける児童たち  
(撮影:平成25年6月4日)

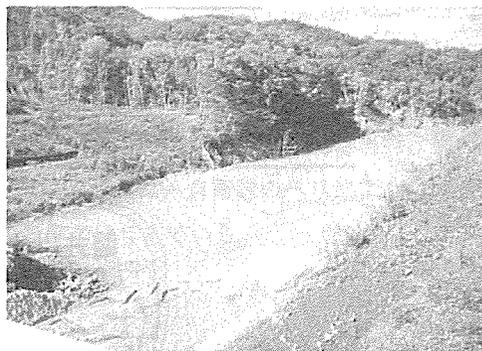


写真3 地すべりによって形成された天然ダム  
(撮影:平成24年10月27日)

すべりにより国道342号は寸断され、孤立した住民は避難所である本寺小学校へ避難することとなった。

市野々原被災地展望広場では、地すべりに対する対策工事や天然ダムの様子を見学することができる。また、広場には災害発生時の写真や解説が掲載されたパネルが展示してあり、天然ダム形成のメカニズムと復旧工事の内容を学ぶことができる。

### III. 調査方法

ここでは2011年～2012年にかけて実施した一関市災害遺構の実態調査について説明する。本調査は、一関市災害遺構を訪れた人々に見学理由や見学してみたの感想を質問し、災害遺構の利用実態や見学者に与える効果などを明らかにするために実施した。災害遺構である祭時被災地展望の丘、祭時大橋見学通路、市野々原被災地展望広場の3地点を訪れた見学者に対し、聞き取り形式でのアンケート調査を実施した。アンケートは全3回行い、1回目は2011年11月3日(木)：回答者数33名、2回目は2012年7月29日(日)：回答者数22名、3回目は2012年10月27日(土)：回答者数50名となり、全回答者数は105名となった。アンケートの質問項目は表1に示す。

表1 一関市災害遺構アンケート質問項目一覧

		回答形式
属性	Q 1 年齢・性別	自由回答
	Q 2 どこから来たか	自由回答
	Q 3 誰と・何人で来たか	自由回答
	Q 4 岩手・宮城内陸地震の記憶	単一選択
一関市災害遺構の認知度	Q 5 以前から知っていた一関市災害遺構	複数回答
	Q 6 知っていた箇所はどうやって知ったか	単一選択
祭時被災地展望の丘	Q 7 展望の丘は見学したか・予定はあるか	単一選択
	Q 8 展望の丘は何度訪れたか・その理由	自由回答
	Q 9 丘を見学しようと思ったきっかけ	単一選択
祭時被災地見学通路	Q 10 見学路は見学したか・予定はあるか	単一選択
	Q 11 見学路は何度訪れたか・その理由	自由回答
	Q 12 見学路を見学しようと思ったきっかけ	単一選択
市野々原被災地展望広場	Q 13 市野々原は見学したか・予定はあるか	単一選択
	Q 14 市野々原は何度訪れたか・その理由	自由回答
	Q 15 市野々原を見学しようと思ったきっかけ	単一選択
災害遺構の取り組みへの評価・考え	Q 16 見学後の防災意識の変化	単一選択
	Q 17 災害遺構の取り組みへの評価	単一選択
	Q 18 見学しての感想	自由回答
	Q 19 災害遺構として期待していたもの	単一選択
	Q 20 一関市の事例以外に災害遺構を知っているか	自由回答
	Q 21 取り組みへの意見・指摘	自由回答

## IV. 調査結果

ここからは全3回実施したアンケート結果をみていく。なお、集計は3回分を合わせたものを主にみていく。一関市災害遺構見学者を対象とした聞き取り調査により、以下の事柄が分かった。

### 1. 属性

見学者の年齢層は60代が35%を占め最多で、40～60代の見学者が75%を占める。30代以下の見学者は8%のみであった。最も多かったパターンは、40代以上の夫婦で見学に訪れるというものである。見学者の居住地をみると、主に岩手県南部（一関市、奥州市）と宮城県からの見学者の割合が多かった。この要因として、祭時被災地の所在が一関市であり、ちょうど宮城県との県境に近いことが挙げられる。また、2011年に発生した東日本大震災により、岩手県及び宮城県民の危機意識が底上げされたことが影響したと考えられる。

誰と、何名で見学に来たかについては、家族と一緒に見学している人が多かった。人数としては「2人」が過半数以上で、傾向としては夫婦で訪れる場合が多い。岩手・宮城内陸地震の記憶については、災害遺構を訪れた人々のうち、岩手・宮城内陸地震について、ほとんどの人が覚えていた（105人中の85人）。

### 2. 祭時大橋及び祭時周辺災害遺構施設の認知度

一関市災害遺構の認知度については、祭時大橋及び市野々原被災地等の災害遺構施設の認知度をみると、全回答者の105名のうち、祭時大橋自体を知っていた人は約6割であった（図3）。祭時大橋自体は広く認知されていることが分かった。しかし、その周辺の災害遺構見学施設（祭時被災地展望広場、祭時大橋見学通路）や市野々原被災地については、ほとんどの見学者

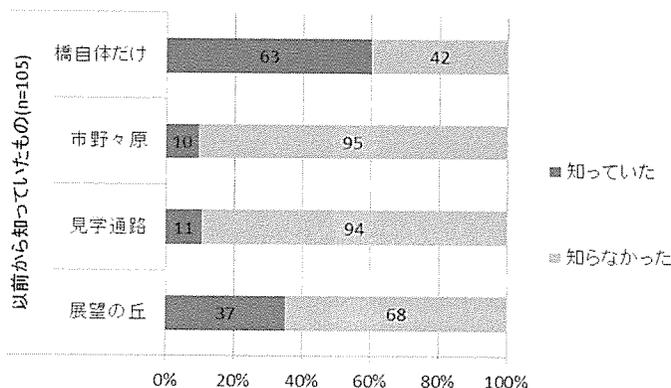


図3 各災害遺構施設の認知度 (n=105)

は知らないという結果となった。これについては、主にPRの不足や標識の分かりにくさが影響していると考えられる。

祭時大橋の存在を知ったのは、「震災当時のニュースや新聞など」がきっかけの人が過半数を占め、その次に多かったのは「実際に目にして知っていた」であった（図4）。落橋した祭時大橋を知っていた人は多かった一方で、祭時大橋見学通路や市野々原被災地展望広場の存在について知っている人は、あまり多く見られなかった。現地には道路沿いに大きな案内板や看板などがないことから、見学通路や市野々原被災地展望広場の存在に気付かない人が多いと考えられる。

### 3. 祭時被災地展望の丘の見学状況

展望の丘の見学のきっかけとして図5に示したように「たまたま立ち寄った」という回答が過半数を占めていることが分かる。一関市の災害遺構は国道342号線沿いにあり、祭時被災地展望の丘の駐車場は広くなっていたため、展望の丘に立ち寄り易いことも「たまたま立ち寄った」という回答の多さにつながったのではないかと考えられる。また見学のきっかけとして「人づてに聞いた」という回答も見られたことから、災害遺構の見学者による波及効果も期待できる

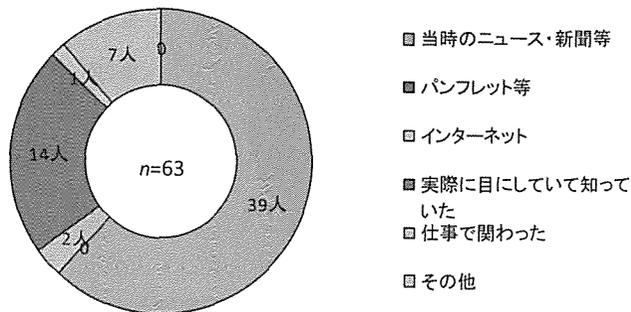


図4 祭時大橋自体はどのようにして知ったか

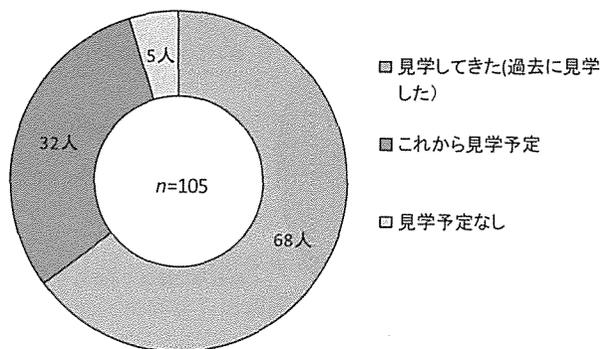


図5 祭時被災地展望の丘の見学状況

と考えられる。

祭時被災地展望の丘には何度訪れたかについては1回が7割で最も多い(図6)。何度も展望の丘を訪れている人の理由としては、「温泉に来たついでに立ち寄った」という回答が多く見られたことも特徴的である。また、「子供・友人に見せたかったため」という回答も見られた。災害遺構は、災害について継承していく場所、手段としても利用されていることが分かる。見学通路を見学するきっかけとしては、「新聞・ニュースで知り興味を持った」「たまたま立ち寄った」の2つの回答がどちらも半々くらいであった(図7)。ただ、実際に見学通路を見学したことがある人は、展望の丘と比べると非常に少ないことが分かる。

#### 4. 災害遺構の取り組みへの評価

災害遺構の取り組みへの評価としては、肯定的な意見が多く見られ、災害の痕跡を保存する災害遺構の取り組みに対して否定的な意見あまり見られなかった(図8)。しかし一方で、「取り組み自体はよいが、活用できていないと思う」という回答も見られたことから、災害遺構の活用方法については、まだ改善の余地があると考えられる。

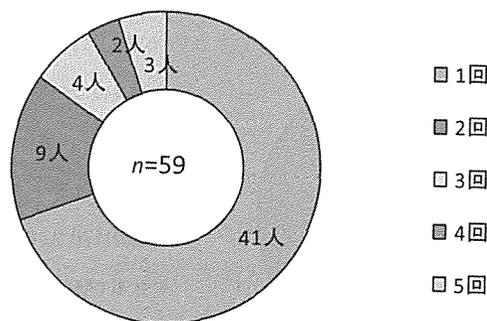


図6 祭時被災地展望の丘には何度訪れたか

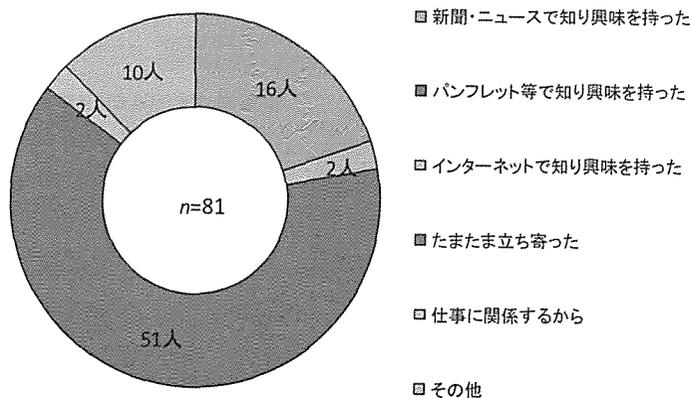


図7 祭時被災地展望の丘を見学したきっかけ

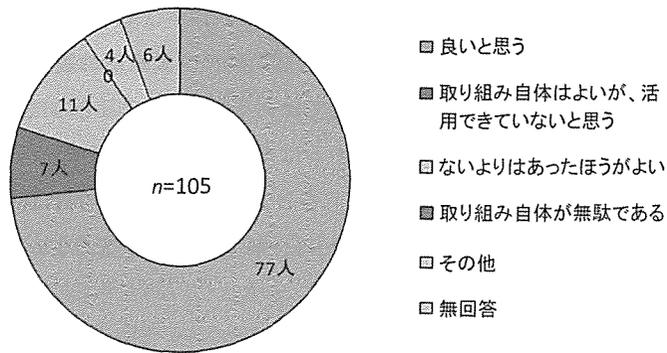


図8 災害遺構の取り組みへの評価

5. 災害遺構を見学してどのように感じたか

災害遺構を見学した人々に感想を聞いてみると、「災害の大きさを実感した」「自然の脅威を感じた」「衝撃的だった」という声が多く聞かれた。災害遺構の見学後の防災意識の変化をみても、見学後に防災意識が高まったと回答する見学者が多いことから、災害遺構は見学者に大きなインパクトを与える存在であることが分かった。また見学者の感想として、「災害遺構を次世代にまで残し保存するべきだ」との声も聞かれた。見学者の他の感想としては、「災害遺構の現実が自分の実感とマッチしない」「災害の凄さは分かったが、まだ他人事のようにしか考えられない」などの声が聞かれた。災害遺構を見学することで、自然災害の恐ろしさを実感することはできるが、それを自分自身の生活と関連付けて考えることが難しい場合もあるようだ。一関市災害遺構の場合、保存されたものが見学者に大きな自然の力を強く印象づけるため、それが自分のリアルな生活の中で起こるかもしれないと考えるのは難しいのだと思われる。ただ単に「自然の脅威」「自然のすごさ」を伝えるだけならば今のままでいいかもしれないが、見学者に当事者意識として災害を捉えてもらうことを目的とする場合には、もう少し工夫が求められる。防災にとって災害の怖さや恐ろしさを知ってもらうことは欠かせないことではあるが、本当の防災の目的は「自分の命を守ること」であるため、個人個人の防災に対する当事者意識を高めることが必要である。災害遺構の場合も、見学者の感想を「自然は怖い」というような漠然としたもので終わらせるのではなく、その一步先の「自分も災害に備えよう」というような防災行動にまで発展させることができれば、災害遺構の防災啓発の効果をより高めることとなる。その一步先へ進むためにはどうすればよいかを今後は考えていく必要がある。

6. 災害遺構として遺してほしいと期待するもの

一番多かったのは「なし／無回答」の項目であった（図9）。この原因としては「災害遺構」という言葉自体が未だ定着していないことや、質問の聞き方として「災害遺構として遺してほしいと期待するもの」という聞き方をしてしまったことで、「なし」と答えた人が多くなった

可能性もある。

「その他」で見受けられた意見としては、「3.11震災時の一般家屋の被害、沿岸の建物や船の被害などは残すべき」「ジオパークとして残してはどうか」「残せるものは遺した方が良い」「見て一番印象に残るものを残すべき、そこにあるはずのないものを残す」「残すことで恐怖を与えてしまうものもあるため選択は重要」「亡くなった方が多い場合の物は残さなくてもよいと思う」「被災地の人がいいと思うなら残すべき」「一般生活に差し支えない範囲で残すべき」などの意見がみられた。

7. 災害遺構を見学し、「誰に」「何を」伝えたいと感じたか

伝えたい対象として「家族・子供たち」と回答した人が最も多かった(図10)。自分が災害遺構を見学して感じたことを自分の身近にいる大切な人々に伝えたいという意思を持つ人が多いことが分かる。

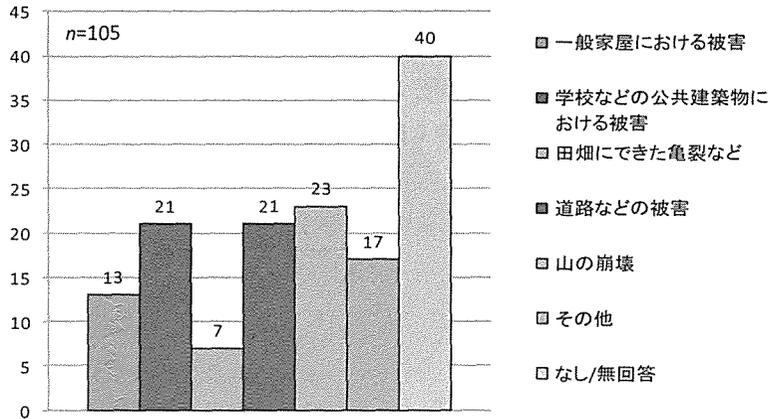


図9 災害遺構として遺してほしいもの (※複数回答)

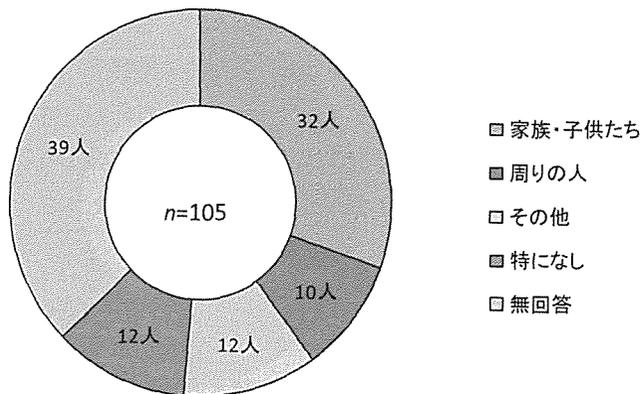


図10 伝えたい対象

伝えたい内容を大きく分けてみると、「当時の被災状況について」「自然災害の恐ろしさについて」「災害遺構の存在について」「災害時の備え・防災意識について」「命の大切さについて」などに分けることができる。

## 8. 一関市災害遺構への指摘・改善点

最も多かったのは「PR不足・場所が分かりづらい」の項目であった（図11）。祭時被災地展望の丘に関しては訪問者も多いことから、比較的分かりやすい場所にあるといえるが、他2地点の祭時大橋見学通路と市野々原被災地展望広場に関しては認知度も低く、場所も分かりづらい傾向にあるといえる。今後どのように災害遺構について人々に発信していくかが大切である。ただ“災害遺構”という位置付けであるため、単に派手にPRするだけというようなやり方では問題がある。

次いで多かったのは「説明不足・説明が分かりにくい」の項目であった。祭時展望の丘や市野々原被災地展望広場には、当時の災害状況が詳しく書かれたパネルが置かれているが、「パネルが専門的すぎる」「何か分かりにくい」というような意見が見受けられたことから、初めて訪れた人にとっては災害遺構に関しての理解を深めるのが少し難しい面があるようだ。情報を効果的に訪問者に与えられるような工夫が必要である。

## 9. 災害遺構見学後の防災意識の変化

第1回目の調査結果は災害遺構全体としての防災意識の変化を対象としていたため、今回は第2回目と第3回目の調査結果を地点毎にまとめてグラフにした（図12）。全体的にみても、災害遺構を見学した後では、防災意識が高まったと答える人がほとんどであった。中には「日頃から防災意識あり」と回答した人が1名、また「特に何も感じず変化なし」と回答した人が1名みられた。

第1回目の結果の所でも述べたように、設問の仕方が誘導的であったため、本当に防災意識

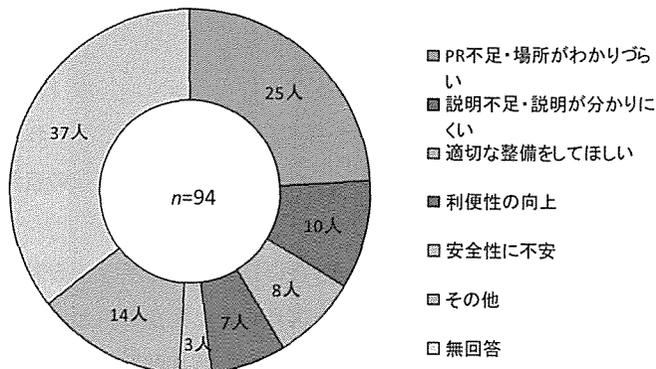


図11 一関市災害遺構施設への指摘・改善点（※複数回答）

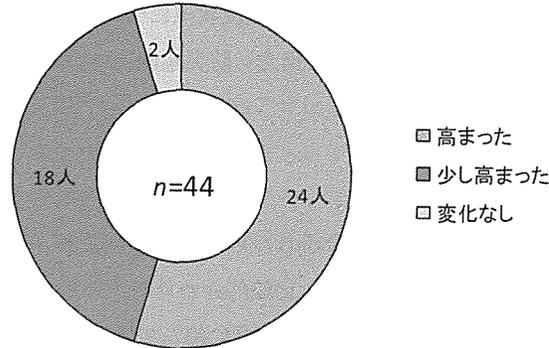


図12 災害遺構見学後の防災意識の変化(祭時被災地展望の丘)  
(※第1回結果は除く)

が高まったかどうかは裏付けができていないが、他の設問にあった「実際に見て感じたこと」「伝えたいこと」の質問項目に対する訪問者の回答を見ると、災害遺構が見学者にもたらす防災意識の啓発効果はあると考えられる。災害遺構の存在は訪問者に何かしらのインパクトを与え得ると考える。

#### 10. 災害遺構が防災教育に果たす意義

災害遺構は地域の防災教育に与える影響は大きいと考えられる。そこで平成25年に実施された小学生向けの防災学習会である「磐井川砂防探検隊」を取り上げ、この探検隊に参加した一関市内の小学校6校の児童165名を調査対象とした。この砂防探検隊は国土交通省岩手河川国道事務所、岩手県、一関市が主体となって実施しているものである(7, 8, 9)。砂防探検隊が児童へ及ぼした影響を明らかにするために、児童に対してアンケート調査を実施した。アンケートは計2回実施し、第1回目は探検隊終了約2週間後に、第2回目は探検隊終了約4～5カ月後に実施した。参加学年は主に5年生が多かった。

図13は、探検隊参加後に災害遺構を再見学したかどうかを、参加約4か月後に聞いた質問である。全体のうちの約4割以上の児童が一関市災害遺構に再び訪れていた。

図14は、再見学のきっかけを表したものである。一番多かった回答は「たまたま通りかかったから」で、次いで「もう一度行きたかったから」となり、「家族に誘われたから」の順番となった。また、再見学した児童と再見学しなかった児童では、4ヶ月後の自然災害に関する会話量変化にも差がみられた。

図15は災害遺構の再見学の有無と探検隊4ヶ月後の自然災害に関する会話量の変化をクロス集計したものである。これをみると、災害遺構を再見学した児童の方が、自然災害に関する会話量が増えたと回答した児童の割合が多いことが分かる。再見学した児童のうち約50%は会話量が増加していたが、再見学しなかった児童における会話量の増加割合は約34%となった。災

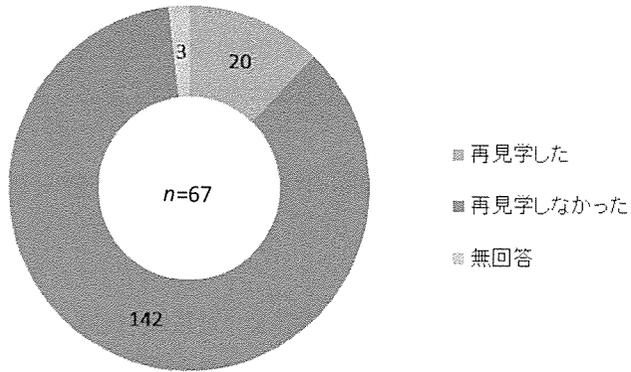


図13 災害遺構再見学の有無

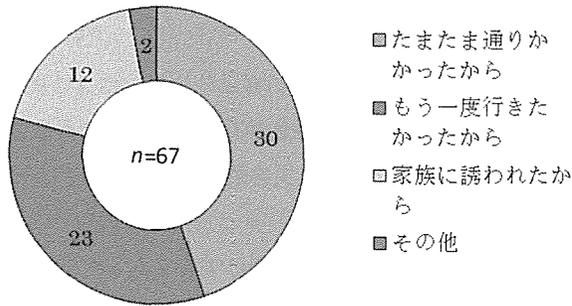


図14 災害遺構再見学のきっかけ

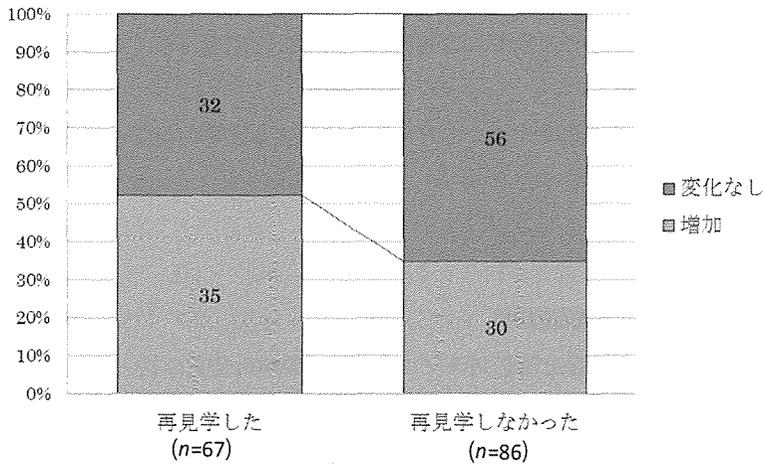


図14 災害遺構再見学のきっかけ

害遺構は児童の身近に存在しているため、再見学をする機会が多いと考えられる。災害遺構を再見学することで、児童の地域災害への関心が維持されやすくなる傾向が伺える。再見学をきっかけに、災害や防災に関する会話量が児童や家庭のなかで増えることを願う。

## V. 巖美地区長及びJTB東北への聞き取り調査

### 1. 巖美地区長への聞き取り調査結果

追加調査として、災害遺構がある地域に住む区長に対して、住民の災害遺構に対する意見等についての聞き取りを実施した。調査対象は一関市巖美地区区長とし、調査方法は電話で聞き取り調査（計5問の質問を実施）をした。調査実施日は2012年12月14日である。

調査結果は以下の通りである。

1) 市野々原被災地展望広場、祭時被災地展望の丘、祭時大橋見学通路、祭時大橋自体で以前から知っているものはどれですか？

回答としてはすべて知っているであった。

2) 祭時大橋や市野々原被災地のように、過去の災害を後世に伝えることを目的として、災害の爪痕をあえて復旧せずに保存したものを災害遺構と呼びます。このような取り組みをどのように評価しますか？

回答としては強くというほどではないが評価はするであった。

3) 区の総会などで災害遺構に関する話が出ることはありますか？

回答としては話をした事がないであった。

4) 災害遺構ができてから地域に与えた影響はどのようなものがあると思いますか？（プラスの面だけでなくマイナスの面も含めて）

回答としては地域としてはまだ始まったばかりなので、正直あまり期待していない。まずは治山や砂防対策をしっかりとするのが先決である。来訪者は多くなったが、プラスもマイナスも現時点ではない。

5) 現在の災害遺構としての祭時大橋や市野々原被災地展望広場の活用の現状について、何か改善すべきと思う点がありますか？

回答としては特にはありません。

### 2. JTB東北への聞き取り調査結果

JTB東北では、一関市災害遺構をプランに含めた「栗駒新発見の旅 モニターツアー（2012年3月20日～21日）」というものを企画し実施していた。また、祭時大橋の見学をプランに含めた栗駒山山開きツアーも2012年に実施していた。そこで、本モニターツアーの概要や実施してみたの感想を把握するために、JTB東北へ聞き取り調査を実施した。

調査対象は株式会社 JTB 東北奥州支店で、調査方法は同様に電話で聞き取り調査（計5問の質問を実施）を行った。調査実施日は2012年12月17日で、聞き取り内容は栗駒新発見の旅モニターツアーについてである。調査結果は以下の通りである。

1) モニターツアーを企画した目的とは？

回答としては一関市からの委託事業である。『ゆっくりひとめぐり栗駒山麓連絡会議』からの委託を受けて企画した。この『ゆっくりひとめぐり栗駒山麓連絡会議』は、岩手県の一関市、宮城県の栗原市、秋田県の東成瀬村といった、栗駒山がまたがっている3県が栗駒山の魅力をアピールするために協議会として設立させた。今回のツアーは一関市が窓口となっている。

2) モニターツアーに祭時大橋の見学を入れたきっかけは？

回答としては栗駒山をアピールするための事業であるが、ツアーは3月実施ということで栗駒山登山の企画をするのは難しかったため、その周辺の観光を企画することとなった。祭時大橋の見学を入れたのは、栗駒山から距離的に一番近かったため。3.11も意識して、岩手・宮城内陸地震を風化させたくないという思いも多少あったが、距離的に近いことのほうが大きな理由である。震災関連を目的としたツアーの企画はあまり良いとは思わないが、今回のツアーに祭時大橋の見学を取り入れたことに抵抗はなかった。

3) ツアーに参加した乗客数は？

回答としては12名。ツアー実施日が祝日と平日にまたがっていた関係もあって、参加人数が少なかった可能性もある。

4) 参加した人の世代、出身県は？

回答としては12名の内訳は、80代…4名、70代…4名、60代…2名、50代…1名、10代…1名であった。夫婦で参加は2組で4人、ひとりで参加は5人である。出身県はすべて岩手県で、一関市が9名、平泉・奥州・花巻が1名ずつであった。

5) モニターツアーの宣伝方法は？

回答としては岩手県内では岩手日日新聞に公告を掲載して宣伝し、栗原市ではチラシで宣伝した。東成瀬村は冬の間は雪のため道路が通行できなくなるため、宣伝はしなかった。

6) 祭時大橋の見学の感想

回答としてはJTBではモニターツアーの参加者に簡単なアンケートを実施していた。4段階で評価し、その結果は以下の通り。

・とても良い：1名 ・良い：11名 ・あまり良くない：0名 ・良くない：0名

参加者の方々の感想としては地震跡として記念になる、百聞は一見にしかずで参考になった、自然災害のすごさが視覚的に分かった、これからの保存が楽しみ、次の時代へ残すことは良いと思う、新聞を読んでいて知っていた、次は雪が消えてから橋の近くまで行きたいなどであった。

7) 祭時大橋を見学に組み入れた他のツアーはあるか？また予定はあるか？

回答としては祭時大橋を組み入れた他のツアーとしては、栗駒山山開きツアーがある。こちらも市からの委託事業で、5月の土日に実施した。このツアーも1泊2日で、1日目は観光、2日目は登山を行った。祭時大橋の見学は1日目である。

回答としては今回のツアーにも祭時大橋の見学を組み入れた理由は、祭時大橋は栗駒山までの通り道にあり、ツアーを組むうえで丁度いい場所にあったためであった。また、3月のツアーでも参加者へインパクトを大きく与えることができたため今回のツアーにも取り入れようと思ったが、「震災を風化させないように」というような明確な理由はなかった。

また今後の祭時大橋を組み入れたツアーは、登山関係で1泊2日のツアーであれば企画する可能性もある。しかし、震災を風化させずに伝えていくために考えたツアーは今のところ企画予定はないとのことである。さらに祭時大橋が絡む一関市からの委託事業は上記で挙げたような、「栗駒山の魅力をアピールするもの」と「栗駒山登山」の2つである。委託事業でないとツアー額が高額になり、商品も売れない。市から予算をもらえると、商品の値段も抑えられる。

#### 8) 栗駒山山開きツアーの参加者と見学感想等について

参加者が20名であった。回答としては30代：1名、50代：1名、60代：12名、70名：5名、無回答：1名であった。出身県は岩手県：11名、宮城県：3名、その他：4名、無回答：2名である。宣伝方法…宣伝は岩手県内のみで行った。岩手日日新聞で広告宣伝をした。しかし栗原市の一部でも日日新聞を購読している地域もあり、参加者の中には、現地でたまたまツアーの存在を知って参加した人や、岩手県内の人から紹介されて参加した人もいた。

祭時大橋見学の感想について、このツアーでも参加者に簡単なアンケートを実施した。結果は以下の通りで、17名の回答があった。

・とても良い：15名　・良い：2名　・あまり良くない：0名　・良くない：0名

参加者の方々の感想としては、自然災害は恐ろしい、以前よりもきれいになった、保存すべき、観光へ前向きに進んでほしい、永久に保存するのはいかがなものか、地元の者だが今回ちゃんと見学してみて深く印象を受けたなどであった。

#### 9) 担当者の意見として、祭時大橋周辺はどのように整備して欲しいか？

回答としては展望の丘はあのまま良いと思う。遊歩道に関しては、語り部さんがいればいいと思う。可能であれば、災害時の状況などについて震災を実体験した人に説明してもらいたい。ちなみに現在はバスガイドさんが現地で説明をしてくれている。各見学箇所は少し分かりづらいいと思うが、看板はあまりない方がいい。

#### 10) 担当者の意見として、災害遺構の整備（取り組み）についてはどう思うか？

回答としては祭時大橋の場合は、日常生活から離れているため残しても良いと思う。震災が忘れ去られないためにもそう思う。ただし、東日本大震災のように被害が大きい場合は、生活が優先されるべきであるから、人の生活圏内に遺構を残すのは避けた方がいいと思う。災害遺構は場合を考慮しながら保存を考えるべきと思う。

## VI. ま と め

本調査では、一関市災害遺構の利用状況の実態を明らかにし、災害遺構のもつ効果について考察した。遺構の見学者は岩手県や宮城県に居住している人が多く、家族と一緒に遺構を見学する人々が多かった。また遺構を見学した理由として、「たまたま立ち寄った」という回答が非常に多かった。これは、一関市災害遺構が道路沿いに存在していることが理由として考えられる。この“たまたま”は重要であると考えられる。遺構をたまたま通りかかった際に、「あの日この地域で災害が起こったのだ」と振り返る機会が持てるということだけでも、災害を風化させないためにも、非常に貴重なことだと言える。災害遺構の見学をきっかけに家族内の防災に関する会話が増えれば、防災波及効果も期待できる。防災意識の維持には継続性・持続性が大切であるため、災害遺構が持つ“見学の反復性”は貴重な機会として捉えていく必要があると思われる。

今回の調査対象とした一関市災害遺構は、祭時大橋、祭時大橋見学通路、祭時被災地展望の丘、市野々原被災地展望広場の4カ所であったが、各箇所の認知度を調査したところ、祭時大橋の認知度は高かったが、他の3カ所の認知度は低い傾向にあった。見学者の中には、「災害遺構の存在が分かりにくい」「それぞれの場所の位置が分からない」というような意見もいくつか見受けられた。遺構は災害の爪痕を保存したものであるため、派手なPRをする必要はないが、災害遺構が一関市に存在しているということを確実にPRしていくことは必要なことだと考えられる(10)。また遺構現場には、当時の災害状況などが書かれた解説パネルがあるが、そのパネルが「専門的すぎて分からない」という意見も見受けられた。見学者に理解を深めてもらうためにも、現場の解説者的存在が今後求められるかもしれない。

災害遺構を見学した人々に感想を聞いてみると、「災害の大きさを実感した」「自然の脅威を感じた」「衝撃的だった」という声が多く聞かれた。災害遺構の見学後の防災意識の変化をみても、見学後に防災意識が高まったと回答する見学者が多いことから、災害遺構は見学者に大きなインパクトを与える存在であることが分かった。また見学者の感想として、「災害遺構を次世代にまで残し保存するべきだ」との声も聞かれた。それに加え、遺構を見学した人に誰に何を伝えたいかを質問したところ、伝えたい相手としては「家族・子供」が一番多く、伝えたい内容としては「当時の被災状況について」「自然災害の恐ろしさについて」「災害遺構の存在について」「災害時の備え・防災意識について」「命の大切さについて」などが挙げられた。災害遺構は見学者に、自然災害の脅威を伝え防災意識を高めるだけでなく、見学者自身が誰かに伝えたいと思うような伝達意識も高める効果があると考えられる。また、昨年6月に実施された小学生を対象とした磐井川探検隊参加後に災害遺構を再見学したかどうかを、参加約4か月後に聞いたところ、全体のうちの約4割以上の児童が一関市災害遺構に再び訪れていた。災害遺構を再見学した児童の方が、自然災害に関する会話量が増えたと回答した児童の割合が多い

ことから永続的な防災教育としての教材としての活用が望まれる。さらに、JTB東北では一般の方を対象にして、一関市災害遺構をプランに1泊2日のツアーとして実施しており、様々なアプローチからの活用が望まれる。

災害遺構は、2008年の岩手・宮城内陸地震による自然の脅威や災害の教訓を次世代に伝えたいという想いで保存されている。その想いを大切に受け止めながら、わたしたちも次世代へ継承していく必要がある。今回の調査の結果、一関市災害遺構は見学者の防災意識を啓発するだけでなく、伝達意識の啓発も促すことがわかった。「伝えたい」という想いが継承されることで、それが災害文化となる。矢守ら(2007)は災害文化に求められることとして、①ハードとソフトの両輪があること、②生活の中に埋め込まれていること、③継続性・持続性・反復性があることの以上3点を挙げている(11)。この3点について一関市災害遺構にあてはめて考えてみると、①ハード構造物保存やハード対策が見学できるだけでなく、防災教育教材としてのソフト面での活用ができる、②遺構の見学きっかけに「たまたま立ち寄った」の回答が多かったことから、見学者の生活圏の中に遺構が存在していること、また一関市に住む住民にとっては身近な存在となっている、③遺構は国道沿いに保存されているため見学者も多く、国道を通る者にとっては反復性もあるし、将来的にも遺構は存在することから継続性・持続性の特徴もある。以上のように、一関市災害遺構は災害文化に求められる3要素を満たしていた。一関市では災害遺構を中心とした災害文化が形成されつつあると考えられる。今後も遺構を利用した災害文化が少しずつ大切に形成され、人々の自然に対する想いや次世代に対する想いなどが継承されていくことが望ましい。

おわりに、本調査を進めるにあたり助言とご協力を戴いた一関市一戸欣也建設部長(現国土交通省)はじめ一関市役所職員の皆様、岩手河川国道事務所の藤村直樹前調査第一課課長、福田修前調査第一課長、そして同課職員の皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また聞き取り調査の手伝いをしていただきました岩手大学農学部共生環境課程砂防学研究室の学生の皆様に感謝申し上げます。

## 引用文献

- (1) 石川宏之(2010)「D-18 防災教育に災害遺構を活かすためのミュージアム活動によるエリアマネジメントに関する研究：洞爺湖周辺地域エコミュージアムを事例として、日本建築学会東北支部研究報告集.計画系(73)：195-200.
- (2) 一関市(2012) 広報いちのせき「I-Style～復興への道程『前へ』」。2012年7月号：1
- (3) 一関市(2012)パンフレット「岩手・宮城内陸地震～震災の記憶と継承～」。
- (4) 国土交通省岩手河川国道事務所(20011)「磐井川流域フィールドミュージアム」パンフレット。

- (5) 国土地理院, 電子国土Web「地理院地図」. <http://www.gsi.go.jp/>
- (6) 岩手河川国道事務所・岩手県・一関市 (2012)「磐井川砂防探検隊を開催します」. 記者発表資料, 平成24年6月13日
- (7) 一関市, 岩手県南広域振興局, 岩手南部森林管理署, 岩手河川国道事務所 (2013)「岩手・宮城内陸地震から5年目を迎えて～震災を風化させない取り組みを 実施します!～」. 記者発表資料, 平成25年5月27日
- (8) 一関市 (2012) 広報いちのせき「I-Style～『6.14』一関の今」. 2013年7月15日号
- (9) 岩手日報 (2013) 新聞記事, 2013年6月5・6・7・8・13・14・15・18・21・27日号, 岩手県内における防災教育や砂防探検隊に関する記事
- (10) 一関地法産業活性化協議会 (2011) 国道342号沿い観光防災情報パンフレット.
- (11) 矢守克也・諏訪清二・船木伸江 (2012) 夢見る防災教育. 57～67, 晃洋書房出版, 東京.